

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 522 号 ] 2005 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.522  
December 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 過去の鏡に照らして 光源としてのイヴァン・イリイチ

丸山 真人 (後援会員)

先日、藤原書店からイヴァン・イリイチ著『生きる意味』という翻訳本が出版された。イリイチが亡くなってこの12月でちょうど3周年になる。私は遺言書を読む思いで本書に目を通した。原書が出版されたのが1992年。原題は、"Ivan Illich in Conversation"で、カナダの放送局CBC(日本のNHKに相当)の記者ディヴィッド・ケイラーがイリイチに特別に頼み込んで連続インタビューを行ったその記録だ。私にとって、イリイチは故玉野井芳郎先生(1985年没)と並ぶ恩師である。玉野井先生と交流の深かったイリイチは私を玉野井先生の後継者として認めて下さり、本書においても、私がイリイチと玉野井先生の対話をきっと継承してくれるであろうと述べている。

実は、私はその期待にこたえることができなかった。私がイリイチに最後に会ったのは、おそらく本書の原書が出版される前年あたりだったと思う。ちょうどその頃、彼は"In the Mirror of the Past"という別の講演集を出版するところで、私にその翻訳を依頼してきたのだ。私は引き受けた。しかし、訳出の仕事はなかなか進まなかった。そのうち、翻訳契約をした日本の出版社の社長が亡くなったり、私の大学での仕事が忙しくなって、翻訳作業は停滞し、イリイチとの対話は次第に間遠になっていった。イリイチと私の共通の友人から彼の病気のことを聞かされたのはそんなときだった。90年代の終わり頃だったか、イリイチから突然メールが届き、日本の友人たちは今どうしているか知りたい、と伝えてきた。私は、いつか会って話をしたい旨の返事を書いたと思う。実際、会いに行こうとずっと思っていたのだが、ついにその日はやって来なかった。

・12世紀にもどって見えてくるもの

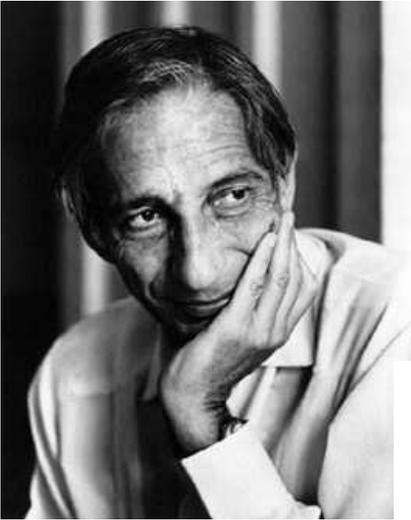
ところで、In the Mirror of the Pastとはどういう意味だろうか。「過去の鏡に照らして」ということになるだろうか。多分そうだろう。しかし、それは「温故知新」とどう違うのだろうか。私にはそれがずっと疑問として残った。それがわかるまではこの本の翻訳はできそうにないと思われた。言い訳めいているがそんな気がしてならなかった。

『生きる意味』を読んで、ようやく答えがわかったように思う。過去とは歴史家イリイチの得意とする12世紀。イリイチによれば、近代ヨーロッパの独自の姿を理解しようとするなら、12世紀半ばまで遡らねばならない、という。ルネッサンスではなく何故12世紀半ばなのか。その時代に

は、中世初期において固定化された世界観、人間観、キリスト教会によって制度化された聖書解釈から解放されて、自由に物を考える知識人たちが輩出し、新しい学問が生まれ出ようとしていたらしい。たとえば、聖ヴィクトールのユーク(フーゴー)は、人間は原罪ゆえに弱い存在なので、その弱さを補うために道具を使う必要があり、その使い方の創意工夫の積み重ねこそ学問的営為であると考えた。まさに、生きるための学問である。

ところが、イリイチによれば12世紀末にはこうした新しい学問のあり方が早くも忘れ去られ、より精緻化され制度化された固定観念のみが大学で教えられることになる。途中を省略して結論を述べれば、そうした制度化の波がいくつも背景にあって、初めてヨーロッパに近代資本主義が成立したというのである。近代資本主義は、いわば機械システムに人間の生活を従属させるようなものであり、人間の欲求すら制度によって外部から定義され、一定の様式によってのみ欲求を満たすことが許されるような社会を作り出す。貧富の格差も性差別も、ともに資本主義に固有の仕方で現れており、人間から生きる意味を奪い去っていく。しかも、私たちはそのことに気付かないのだ。貧富の格差も性差別も昔からあったし、近代文明はともかくも私たちを封建的な不自由さから解放したのではないかと、私たちはごく「自然」に思う。イリイチによれば、私たちの使う言葉それ自体が、このような思考パターンを導き出してしまっただけという。だから、言葉の意味がその語源からどのようにして変化を遂げて現代に至ったのかを見極めなければならない、という。

たとえば、「慈悲」という言葉。イリイチは、ルカによる福音書の第10章に出てくる「よきサマリア人」の話、つまり、ある律法学者がイエスを試して、「永遠の命を受け継ぐ方法として、律法には『隣人を自分のように愛しなさい』とあるが、私の隣人とは誰か?」とたずねたのに対して、イエスは、「追剥ぎに襲われ半死状態で道端に倒れている人の脇を、ある祭司とレビ人が避けて通り過ぎたのに、あるサマリア人はこれを介抱し宿屋に託して治療費まで置いていった。この3人の中で誰が追剥ぎに襲われた人の隣人になったか?」と問い返す部分を取り出して、これを、次のように解釈している。つまり、異邦人であるサマリア人は、誰に強制されたのでもなく、自然に憐れみを感じた結果、自ら進んで、半死状態のユダヤ人旅行者を助けたのだと。



イヴァン・イリイチ  
1926年、ウィーン生まれのユダヤ系知識人・社会評論家・文明批評家。2002年12月2日に死去。  
写真 <http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Ivanillich.jpg>

だから、それは他者（制度）から「敵を愛せよ」と強制されることとは全く違うのだとイリイチは言う。

ここには、10月20日の朝日新聞の書評で柄谷行人氏が言うように、制度や国家への鋭い批判が含まれていることは間違いないだろう。つまり、慈善は制度によって強制されるものではないということだ。しかし、柄谷氏はイリイチを左翼的知識人として無理に位置づけようとしており、一面的でよくない。イリイチは、もっと心の内面の問題、現代人の心に深く刻み込まれた傷跡をはっきりさせようとしているのだと私は思う。イリイチは、ケイリーの問いに答えて、「飢えている人」を「ケアされるべきニーズを有する人」と定義するのであれば、それは私には関係ない話だと言い、そんなことは慈善家や政治家に任せればよいと言う。ここでは、「飢え」という言葉自体が制度的に定義された枠組みを持っていて、心の内面からにじみ出る慈悲の対象とは無関係だということである。そして、イリイチは、私はむしろあのサマリア人のようでありたい、と言う。

非常に微妙なニュアンスなのだが、イリイチは人間の良心は外部から定義されるものではなく、自分自身の中から湧き出てくるものと考えていたに違いない。イリイチは、聖ヴィクトールのユークの同時代人であったアベラールとエロイズが、結婚の誓いを立てるに際して、歴史上初めて、互いに対等の立場で、しかも明らかに個人として相手の伴侶となることに「イエス」と答えたのだということを強調している。その意味は、12世紀半ばにおいてようやく、イリイチの愛する人間らしい人間の姿が現れたということではないだろうか。だからこそ、12世紀の鏡をもって、変わり果てた現代社会の姿を照らしださなければならぬと考えたのではないだろうか。

#### ・現代社会を照らす光源

しかしながら、なお疑問が残る。いったい、現代社会を照らし出す光源は何か。鏡と対象それ自体があっても、光源がなければ対象は照らし出されないではないか。ここで、イリイチとケイリーのじつに興味深いやり取りを紹介しよう。ケイリーが、「しかし、人が『ニーズ』や『ケア』や

『開発』といった諸々の固定観念...を暴露し、それらの存在を自覚するにいたったとして、そのうえで次にかれはどうすべきだとおっしゃるのですか?... 実際のところ、あなたが勧めておられるのは、闇の中を生きることなのでしょうが?」と問うのに対して、イリイチは、「いいえ違います。闇の中にろうそくの明かりを運ぶこと、闇の中のろうそくの明かりになること、自分こそ闇の中の炎であることを知ることなのです」と答えている（訳書、220ページ）。

ここを最初に読んだとき、私はまだその真の意味に気が付かなかった。しかし、繰り返し考えてみて、これこそ、12世紀の鏡に現代社会を照らし出す光源に他ならない、と知るに至った。イリイチが、12世紀の思索家たちと対話するのは実に楽しいことだ、と語るのは、それによって自らの炎が燃え上がることを知っていたからなのだろう。イリイチは神に召されるまで、その炎を燃やし続けていたに違いない。翻って、私は果たしてそのような炎になることができるのだろうか。いまだに自信はない。けれども、イリイチとの想像上の対話を心から楽しいと思えるようになったとき、私の灰の中にくすぶっている火種も燃え盛ることになるかもしれない。いや、是非そうでありたいと思う。なぜなら、イリイチは今でも私の師匠であることに変わりはないのだから。（2005年11月30日）

筆者、丸山真人（まるやま・まこと）氏は、東京大学大学院総合文化研究科教授（経済人類学）

たまたま新聞紙上で、イリイチの邦訳書の広告を見た。丸山真人氏に何か月報のために書いていただくこと、思いつきました。丸山氏は私の願いに真剣に答えてくださり、ご多忙のなかで、11月末日までというお約束をみごとに果たしてくださいました。「自らの炎が闇のなかに燃えあがるように」という結論は、含蓄の深いものですが、私たちがこの12月17日の定演でうたう わが内に 愛の火ともし（BWV123, 第1曲 合唱）、主の愛よ われらにも熱き思いをたまえ（BWV197, 第5曲 コラール）などの内容にも迫るものではないでしょうか。（大村恵美子）

---

《マタイ受難曲》の合唱 練習の手引き

## 「受難曲」終曲のまえに現れる

### スケルツォ風合唱曲

大村 恵美子

《ヨハネ受難曲》の最終合唱 39(67) いこえ 聖なるかばね の前に、群衆の合唱 27b(54) これを裂くべからず 籤もて分かつん が現れ、そして《マタイ受難曲》の最終合唱 68(78) 歎きつつ み墓のもと の前に、66b(76) 主いかなりや かの偽り者 が現れる。 数字は新バツハ全集版による楽曲番号。( )内はバツハ協会版の楽曲番号。

この2曲の間には、多くの共通点があって、聴く者はそ

ここで何か異様な印象にとらえられる。イエスの十字架刑がだんだんと終局にむかって急迫してゆくときに、だしぬけに俗っぽい興奮にかられるような内容の音楽が挿入されるのである。

《ヨハネ》の場合には、まるで「うつつをぬかす」という感じで、オーケストラが、たとえばジントのように、速く規則的な4分音符、8分音符、16分音符の反復伴奏形で終始活気づけられ、合唱はしつこいほどにくり返し、軽佻浮薄な兵卒たちの言いかわす言葉を単純なフーガ主題に仕立ててつきつける。ヨハネ福音書によるその発言の全容といえは 「それ[イエスの下着]を裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう」(ヨハネ 19:23)。これほど卑しい人間の姿が、これでもかと歌いつのるように、64小節にわたって高らかに鳴りひびく。

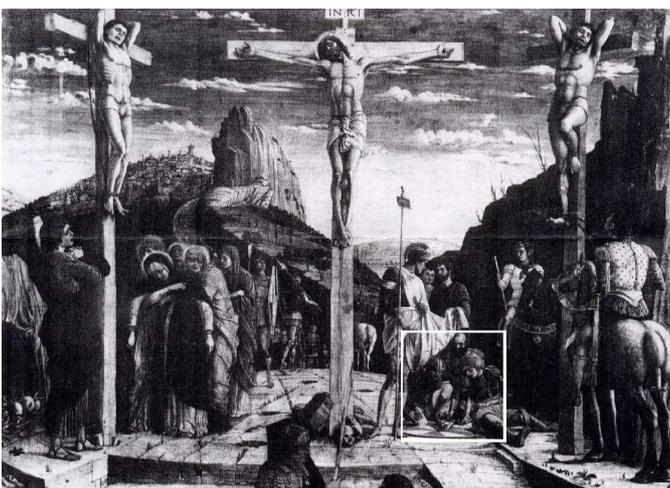
《マタイ》の場合には、イエスの遺体を盗まれぬよう警備を要求する祭司長・パリサイ人らの二重合唱で、かなり重厚な38小節の音楽だが、《ヨハネ》27bと同様、興奮状態で高らかに、後世から見ればピントのはずれたような熱心さを描き出している。

これらの騒がしさ、陽気さは、いったい何だろうか。作品の構成上、いちばん自然に考えられるのは、最後の大合唱を前にして、軽いがしかし中程度の重さをそなえた、古典派のシンフォニーの観念からいって<スケルツォ>楽章に準(なぞら)えられるような、一種の息抜きを設けて、最後の大団円を盛り上げようという趣向ともとれよう。内容的に言うと、世俗の極みのごとき、的外れの人間の仕わざを前に置くことで、来るべき終局の神聖さをいっそう際立て、高めることになるだろう。

いずれにしても、どちらも平易な長調のからりとした陽気な音楽で、大掛かりなアイロニーを表現する。卑俗な人間の、無思慮で粗雑な振る舞い、それが逆説的にあぶり出す神の大きさを、バッハは周到に用意しているのである。

《ヨハネ》の27bについては、1992年(創立30周年)、第71回定期演奏会のプログラムに、杉山好氏がお書きくださった、貴重な解説をご紹介します。

一片のエピソードと見なされかねない27bについて、イエスから剥ぎ取った肌着の所有をめぐる不浄役の兵



マンテーニャ (15世紀), ルーヴル美術館

卒達がくじを引く場面の意外に長大で入念なこの合唱フーガ(八長調4分の3拍子)は、罪人や死人の肌着まで貪欲に奪い合いをするアダムの子孫どもの飽くことなき罪の強欲と自己主張の悪の連鎖フーガと、くじ引きの賽を投げるさまを描写する通奏低音の16分音符固執音型の動きという表層的意味表現の裏に、実はそうした人間ひとりひとりの罪を「清きキリストの義の衣」をもって何とか掩い潔めようとするさらに執拗で忍耐強い神のキリストにある愛の格闘を秘めている。この二重底の深層から見直せば、あの一見愉快な通奏低音の描写も、実は神がキリストによって、サタンに奪いさられようとする人間のたましいの奪還のための細やかで激しい戦いをくり展げている動きとなり、極めてアイロニカルでしかも厳粛な救済史的意味づけを持ったこの劇中合唱曲は、聴者の心の耳を捉えて放さないものと化すること必定であろう。なぜならこれこそ、いかにもヨハネらしい霊的眼光の冴えと透視力のほどをいかに示した釈義だといえるからである。

《マタイ》の66bの場合は、《ヨハネ》27bのように徹底した醜悪さ(と言っても、バッハの音楽は、それこそアイロニカルに、ただ聴くだけでは、十分に官能的な快樂に満ちていて淀みがないのだが)に留まることなく、中間部にあるフーガで三日のちにわれはよみがえらんという、生前のイエスの言葉を、一種の畏怖をもって表明している。

かの偽り者とイエスを誹謗しながらも、また弟子たちの作為的な復活宣言のデマの拡がりを警戒しながらも、やはりあの、イエスの死の場面に居合わせた人々の口をついて出た合唱63b(73)げにこは神の子なりきとの実感が、敵対者たちの個々の心にまで浸透してしまったものようである。



同左部分(枠内)「くじを引く兵士」

イエスの葬送に終る《受難曲》ではありながら、じつはこの《受難曲》全般にわたって、イエスの復活・永遠という赤い糸が見えつ隠れつ、一貫して伸びているのである。そしてその糸の差迫った顕在化を、この66bが果たしているかのようである。

いくら暗闇に閉じこめても、警護を固めても、輝き出るあの光である。この光を、演奏者はつねに表現しなければならない。ナンセンスな、的外れな、当時の群衆の騒ぎや恐れを、同次元に立って単なるリアリズムで再現してはならない。バッハの観照した次元にまで心を高めて演奏しなければならないと思う。

## 後援会からのお知らせ

- 新規会員と長期会員を募る -

8年前の1997年、合唱団の長期計画が打ち出され、創立45周年にあたる2007年にむけて、後援会でも、赤字体制から抜け出す一案として、“年額12,000円の後援会費を、10年分一括前払いで10万円”という呼びかけを試みました。十数名の方々がそのときに応じてくださって、お蔭で「バッハ・カンタータ50曲選」の楽譜出版やCD発行に取りかかる弾みができるなど、その後の活動をもゆとりをもって支えることができました。それまで年間170万円程度の後援会収入が、1998年には258万円超と飛躍的な増収となったのです。

しかし、その後はまた年間160万円台がつつき、会員の皆様の高齢化ということも加わって、2005年10月現在、約30万円の赤字となっています。

合唱団では、昨年より副指揮者をむかえ、また《マタイ》上演に向けて、声楽家講師による発声指導も強化するなど、内容のいっそうの充実をはかり、団員数増加に備えています。一方、団員（とくに若い団員）定着のネックになっている、定期演奏会の経費分担額を軽減することなども実現しなければなりません。

2007年までの展望しか抱けなかった合唱団が、その後、心機一転して、「50曲選」シリーズの完結後も、未来への希望をもって活動を継続することとなった今日、後援会も、団会計の赤字埋め主体だった役割から、さらに積極的な健全経営の一翼をになう、本来の意味の後援会の姿になってゆきたいものと思います。

### (1) 新規会員

新規の後援会員を募集しています。聴き手として、月報の読者として、創立記念パーティ（夏）、クリスマス祝会などのお仲間として、ぜひご参加ください。

### (2) 長期会員

1997年に準じて、ここで再度、“10年分会費の一括前払い10万円”という長期後援会員に、皆様のなかからご応募いただければさいわいです。

= 東京バッハ合唱団「後援会」新規入会のご案内 =

東京バッハ合唱団の活動をご支援ください。

後援会の皆さんと合唱団とを、この「月報」がつなぎます。郵便局にて下記へお振込みいただければ、その日から、「後援会」のメンバーです。

- ・後援会費：1口 12,000円（年額）
- ・郵便振替口座：00190 3 47604
- ・口座名（加入者名）：東京バッハ合唱団  
（通信欄に「後援会入会」と付記ねがいます）

< 後援会員の特典 >

- 1) 定期演奏会（原則として年2回）にご招待します。
- 2) 毎月、合唱団の「月報」をお送りします。
- 3) 合唱団主催の特別演奏会・懇親会などへのご案内を差し上げます。

< お問合せ >

合唱団事務局まで

## 2005年を締めくくる“クリスマス祝会”

12月17日（土）の定期演奏会が終わると、翌々日の“クリスマス祝会”で今年の全ての予定が完了となります。

2005年12月19日（月）18:30 - 21:00

目白聖公会

会費 1000円

この日は、創立以来ずっと、定演の慰労・反省を兼ねながら、忘年会風にエンターテインメントや、持ち寄りパザーなど、楽しさもたっぷり引きつけてきました。ある年などは、器楽アンサンブル等もあり、たまたま外国から訪れていらしたお客様から、こんなにレベルの高いクリスマス会は、すばらしい、とお褒めにあずかったりもしました。

昨年は、いつもより積極的に、団友・後援会員の方々にも呼びかけて、広範囲の方々と一緒に過ごしていただくことにしました。すばらしいリコーダー演奏やスピーチ、またたくさんのパザー提供品をサンタクロースのようにご持参くださったり、大いに盛り上がり、豊かな気持ちで年を終わることができました。

今年も、この月報紙上でお知らせして、いっそう楽しい会となりますよう、皆様のご参加をお待ちします。

なるべく、ご出席をあらかじめお知らせいただければと思いますが、予告なしの参加も歓迎いたします。お仲間もお誘い合わせで、お出かけください。

## 2006年度、年始の練習日程

年明けから《マタイ受難曲》の本格的練習を開始します。

2006年、年始の練習開始は、

- ・1月14日（土）：桜新町（世田谷中央教会、3:30 - 5:30）
- ・1月16日（月）：目白（目白聖公会、6:30 - 8:30）

予告＝2月18日（土）：桜新町（世田谷中央教会）光野孝子先生による《マタイ》声楽レッスンは、第1曲冒頭合唱。

FINE